

有識者 小野 淳氏(株式会社農天気 代表取締役)

## インタビュー概要

### 都市農業について

- 都市農業の魅力は多様性にあつて、郊外農業よりも変化が大きい。消費地が近い地場流通野菜は、地域住民に味や鮮度や安心といった価値を与え、それが農家のやる気にもつながる好循環となり得る。
- 都市農業に限らず農業を維持していくためには、生産物販売だけではなく、人を呼び込んでお金を落としてもらう仕組みづくりが必要。オンリーワンになるにはどうしたらいいか考えなければならない。

### 市外からの農業参画について

- 地縁のないところに出ていく場合、地域に欠けているものの補完や地域課題の解決に資さなければ地域はなかなか受け入れてくれない。
- 地域に欠けているもの・地域課題はその地域ごとに異なり、どこにでも当てはまる答えはない。事業・ビジネスとして入っていくだけでなく、消防団、商工会、祭り、飲み会といった地域に溶け込むことも大切である。

### 農業と他分野連携について

- 農業は観光やコミュニティとの親和性が高い。観光事業者と組んで送客してもらって農業体験を提供したり、飲食・物販・宿泊なども対応できる。子育て・教育という点でも、農業では0歳から畑体験ができ、食育や農育につながっていく。
- ただし、農家と他分野の企業やその他団体の両者だけでマッチングしてもうまくいかないの、最初は橋渡し役が必要となる。

### 行政の支援について

- 保守的な農家と、攻めている農家とがあるが、行政は両方に目を向ける必要がある。保守的な農家は拡大はあまり見込めないが、地域の歴史・文化・景観等を保全する役割を担っているという意味では、それ自体に価値がある。攻めている＝様々な取り組みをしている農家を認めて取り上げることも必要だが、農業の視点だけではなく、都市・まちづくりの観点から応援するなど、農政だけに留まらない捉え方をした方が他の農家とのバランスが保てる。
- 単に設備・機械等投資に関する支援を求める農家も多い。一方で、スマート農業については特定の分野では成立するが、生産性が向上しても価格が下がれば意味のない投資となる。農地の限られた都市農業よりも郊外の大規模農業で親和性が高いのではないかと。